

普段着のわたしたち

10月、町内会の秋祭り。神社に展示されたそれぞれの町内会所持のしょうじょう 狸々。



私たちの地区のお祭りには馴染みの狸々ですが地域性があるようです。

大酒飲みで、どれだけ注いでも尽きない徳利を持ち、幸運をもたらす福の神だとか。能の『狸々』も酒売りの少年に、泉のように尽きる事のない酒壺を与えるというお話。いいなあ。

訶梨帝母

東部青年会の行事で、この地域の西山三



派の各青年僧のチーム対抗ソフトボール大会に参加しました。

全身が筋肉痛となりました。

ボールを投げたらあらぬ方向へ。走ろうと思ったら足がもつれます。運動神経の無さと日頃の運動不足を痛感しました。

しかし悔い改めて生まれ変わろうという気力ありません。ただあるがまま生きていきます。

征阿

拝啓 ロケットマン様

本日、あなた様のご自宅に写真の岐阜迷菓『死神あられ』を我国が誇るクロネコ便にてお送りしました。お召しあがりください。このあられは、世界ギネス記録で最も辛い唐辛子に認定された「キャロライナリーパー(通称死神)」が、特にあなた様用にふんだんに使用されています。これを一口食べ



れば、あなた様の豊富な体脂肪に瞬時に点火し、お尻の穴から火を噴き大気圏外まで飛んで行く事ができるでしょう。是非実験してみてください。尚いつも

のように発射事前通告は必要ありません。ただ、あなた様のお体がレーダーに映るのかは知りませんが、今回は絶対日本上空は通過しないでくださいまし。同じ男性として、あなた様からの「落下物」がとても心配ですし、見たくもありません。もし貧弱なそれを感知すれば、せっかく国民の血税で購入した迎撃ミサイルが全く「やる気」を無くすでしょうから…

俊徳丸



NHKカルチャーセンターで「岐阜おもてなし英語」の体験講座

を受けてきました。What's that long houseboat? と聞かれたとして、あなたならどう説明してあげますか?

迷走坊

先日、幼稚園での保育参観。息子の教室での日常を初めて見てきました。

自身の幼稚園時代を思い出します。私は極悪非道な幼稚園児でした。早熟だったのか、生来の根性悪だったのか、自分以外の園児を「お猿さん」くらいに思い、日々いじめ倒していました。教室の後ろに立たされた事もしばしば。そうされたところで、何処吹く風。先生に謝ろうなどという気持ちは欠片もなく、実に可愛げのない園児でした。当然、保護者参観日でも意地の悪さは発揮され、帰宅後、「お母さんは悲しいやら恥ずかしいやら」と母に泣かれた覚えがあります。

自分が親にした事は、子供にもされる。因果応報。自業自得。故に、息子の参観日は些か不安を感じ、覚悟して臨みました。ところが、幸いというか拍子抜けというか、我が息子は「お猿さん」。周囲の園児たちと仲よさそうにニコニコきやつきや。私が教室に入ると嬉しそうな照れくさそうな表情。優しいパパに似たのね、と安堵。

そしてなぜか少し複雑。

ところで、私は当然ながら周囲の母親の中では一番の年長者。三人、四人目のママさんでも私より若干下。おそらく交わる事は難しかろうとやや距離を置き傍観していた当初。ある朝、法衣姿で幼稚園に送った際（その足で法務があった為）、あるママ

こもりうた^{③4}

に声を掛けられました。とても親しげに「一度お話ししたかったの！」と。法衣の威力、ありがたいや。

それをきっかけに、四人の若いママさんと仲良くさせてもらって

います。双子の男児を持つ二十後半のママ。姉妹の年の差が十歳あるママ、四人の男児のママは四十代前半。三人の女兒を持ち、現在四人目がお腹にいるママは三十代後半。彼女たちのパワーに圧倒され、教えられる事も多々あります。そして、最年長の私が彼女たちにお返し出来る事と言えば・・・宴。

彼女たちは若くに結婚出産し、子育てを続け、かれこれ十数年外に飲みに出かけた事がない、と聞き、私が「夜のママ会」を時々主催します。兄弟姉妹すべて連れてくるので、十数人の子らがうちの本堂におもちやを広げて遊びます。年の大きい子が幼い子を面倒見、みな大はしゃぎ。

そして五人のママ連中はキッチンで大宴会。時々子の事を思い出し、ツバメの親のように子に食物を与えに行きます。



その光景たる

や、少子化ってどこの国の話かしらと感じる有様。うちの阿弥陀様も「今宵は少々騒がしいが、まあ時にはよろう」とお許しくださいっていると信じています。子らの記憶にも、お寺で遊んだことが残るのを願っています。ただその時、母親たちが宴会していたのは忘れていただきたい。

バイクの音



21歳の時、片岡義男の小説にあこがれて中型自動二輪免許を取得しました。あるライダーがツーリングの途中で白飯を購入し、レトルトカレーをエンジンに

ガムテープで張り温めて食べるというシーンにあこがれました。現実には切なく、テープが溶けて不可能であった記憶があります。

私はそもそも自動車もそれを運転することも嫌いでストレスがたまります。以前、雑巾がついたモップで車をめんどくさそうに拭いていて通行人に笑われたこともあります。一日中全く自動車を運転しなくてよい日が私にとっての「休日」と言えるでしょう。そんな私が先日もイヤイヤ運転をして赤信号で停車していると、横にハーレーダビッドソンがやってきました。何と心地良い音でしょう。いつも聞き入ってしまいます。もう何十年もバイクに乗っていませんが、大型の免許を取得して、いつかはあの鉄馬の「心臓音」を独り占めしたいのが還暦前の密かな私の夢です。

そんな時、私の中学の同級生の家の前を通ると、玄関前に今までなかった大型バイクが2台並んでおり、彼がそれを楽しそうに磨いていました。声をかけてみました。息子の大学へ最後の授業料を納めて、「ああ～、これでいつでも会社やめることができる！」と叫んで、奥さんと2人で自動二輪免許を教習所へ取りにいつ

たそうです。現在は毎週末に二人でツーリングを楽しんでいるそうです。最後の授業料を納めた「解放感」は痛い程わかりますし、それがバイクと結びつく「鉄馬方程式」も理解できます。最近では他の同級生に会えば「親の介護」の話ばかりでうんざりしていましたが、彼とは久々の晴れ晴れとした話をしました。

先日、NHKの『ドキュメント 72 時間』という番組で、バイク人の「聖地」とまで言われている都内で一番大きな「バイク用品店」を取り上げていました。この番組は、ある一か所でカメラを回し続け、そこを訪れる人々の「人間模様」を描いたもので、毎回「切なさ」が余韻に残ります。広い駐車場に、まるで展示場のよう買い物客の多くのバイクが駐車されています。そんな中、8歳のかわいらしい女の子が父親の大型バイクを一生懸命磨いています。父親は買い物中のようなようです。いつも父親のバイクの後ろに乗せてもらっているようです。バイクがエンジ音を響かせ動き始めると、彼女はいつも「説明できない眠さ」に襲われてすぐに心地良く眠ってしまうそうです。インタビューに対して、「お母さんのお腹の中にいる時みたいな音がするから」と答えていました。以前から、お腹の中にいた時の記憶が残っている人の存在は聞いたことはありましたが、こうして目にしたのは初めてで、どんな大人になっていくかが楽しみな子でした。やはり、詩人かな… 落車しないように父親の体とベルトで結ばれた彼女の後ろ姿が夜道に消えていきました。きっと、父親の背中の臭いも記憶に残るのでしょうね。イイね！

俊徳丸

考えてみようかな・・・



「お寺でハロウィンをやったらどう？」という提案をいただきました。社会現象ですね。

ハロウィンの起源はキリスト教とは関係なく、ケルト族の^(注)「サウィン祭」説が有力です。

自然信仰の古代ケルト族の暦では、10月31日の夜から11月1日にかけてが夏の終わり、冬の始まりの日でした。秋の収穫を祝うこの夜には、あの世とこの世を隔てる門が開き、先祖の霊が親族の元へ帰って来るのですが、同時に魔女や悪霊も作物を狙って現れると信じられていました。

ドルイド（ケルトの聖職者）が魔除けの仮面をつけて焚き火の周りを踊り、作物や生け贄を火に捧げます。盛大に祝った翌朝、村人たちは火の燃え残りを家に持ち帰ってかまどに火を付け、悪霊シー（Si、ケルト神話の妖精）を追い払ったのです。

このお祭りが後の世に各国の文化と混ざり合って、魔除けの仮面が仮装となり、焚き火がジャック・オ・ランタン（Jack-o'-Lantern かぼちゃをくり抜いて提灯にする）に姿を変え、現代のハロウィンになったそうです。

彼らは死後の世界を信じていました。ケルト族の聖職者たちは、物質と霊魂は永遠であり、宇宙の実体は水と火が交互に絶え間なく

支配する現象の変動を不変であると考えたのです。よって、人間の魂も転生するわけです。

ハロウィンは日本のお盆とお正月を一緒にしたようなお祭りではないでしょうか。

ご先祖の霊がお帰りになるのはお盆もハロウィンも一緒。かぼちゃの提灯を供えるのも、胡瓜や茄子を馬や牛に見立ててお供えすることに似ています。

焚き火の火を持ち帰る習慣は京都八坂神社の「をけら参り」を彷彿とさせます。大晦日の夜、本殿内から灯籠へ移された^{をけらび}「白朮火」で、午後7時過ぎから元日早朝まで参拝者の願いが書かれた白木の「をけら木」が焚かれます。その火を竹でできた火縄（吉兆縄）に受けて帰り、無病息災を願って神棚のロウソクに火をつけて歳神様を迎え、お雑煮を炊く火種とするのです。

違う点は、お盆は亡くなったご先祖を迎えることを喜びます。ご馳走を用意し、盆踊りで慰めます。対してハロウィンは亡くなった方を悪霊扱いして追い払うのです。

東京ディズニーランドが「ハッピー・ハロウィン」と銘打って入園者を集めています。宗教色はなく、仮装パレードです。ケルト族の伝説には魔法、妖精、幽霊がたくさん出てきますから、拙寺でも、お盆に幽霊を墓地に集めて火葬パレードを催してはいかがかと？ 嫌がられるでしょうなあ。 **迷走坊**

（注）ケルト族＝中央アジアから欧州へ移住し、紀元前400年頃最大勢力であった部族集団。

『私説法然伝』(34)

極楽への道⑨

先月号では「恵心僧都源信」という方の

書かれた『往生要集』^{おうじようようしゅう}について、また源信の始めた念佛結社「二十五三昧会」^{にじゅうごさんまいえ}

と「臨終行儀」などについて書きました。

今月はその続きになります。

【恵心僧都源信が目指した「念佛」とは一

体何であったのだろうか？源信の考えに従

って作られた『往生要集』と「二十五三昧

会」の二つがその両輪である。そして源信

は念佛の中で「理観の念佛」(念佛を通して

空を覚り三昧に至る)を理想とし、それが出

来ない者は「色相観の念佛」(阿弥陀佛の

姿を想い描く)を行い、それが出来ない者は

阿弥陀佛に深く帰依して極楽浄土へ往生し

たいという「念」(菩提心)を元にして称え

る「称名の念佛」があるとした。源信に

とつての念佛はあくまで天台宗の思想に基

づくものであり、称名の念佛はあくまで付

随的なものであり、天台的な捉え方であつたとと言える。法然上人もまた『往生要集』

を読んだ。後に『往生要集』に導かれて浄

土佛教の道へと入ったと述べられている。

理観の念佛を至上とする『往生要集』と後

の法然上人の思想は相容れない。しかし

『往生要集』の「思想」が持つ構造、「難

から「易」というところに着目されたのだ

と考えられる。常識的に考えれば、簡単な

事からはじめてより難しい事を習得してい

くことが一つの「道」である。しかし法然

上人はそこに疑問を持たれたのだと言える。

理想的だが難しく実現不可能な方法を源信

が伝えたかったのではない、もっと根本的

に違う何かがあるのではないかと法然上

人は考えられたのではないだろうか？そし

て『往生要集』をスタートとして、法然上

人は様々な「念佛」を模索されていくので

ある。】

法然上人は長い時間をかけて「念佛」と

は何か？を模索されることになるのですが、

そのスタートラインと言えるのが『往生要

集』となったのです。法然上人は『往生要集』とそれに基づく「二十五三昧会」で行われている事に着目されたのではなく、源信僧都の思想の展開の構造に着目されていたことが大切なポイントだと思います。そして法然上人は『往生要集』の構造理解を通して浄土佛教というもの、または佛教全体を見直されようとしていたのではないのでしょうか？

以下次号に続く(征阿)



観経物語(111)

正宗分(しょうじゅうぶん) その65

散善(さんぜん) 上品中生その2

《本文その1》

行者は自ら(を)見るに、紫金の台に坐せり。合掌叉手し、諸佛を讃嘆するに、一念の如き頃に、即ち彼の国の七宝の池の中に産まる。此の紫金の台は、大宝華の如く、宿を経て即ち開く。行者の見は、紫磨金の色を作し、足下も亦七宝の蓮華有り。佛及び菩薩は、俱時に光明を放ち、行者の身を照らすに、目は即ち開明す。前の宿習に因り、普く衆声を聞くに、純ら甚深の第一義諦を説けり。即ち金の台を下り、佛に礼して合掌し、世尊を讃嘆す。七日を経て、時に応じて阿耨多羅三藐三菩提に於いて、不退転を得たり。時に応じて即ち能く飛行して、徧ねく十方に至りて、諸佛に歴事す。諸佛の所に於いて、諸々の三昧を修め、一小劫を経て、無生忍を得。現前に授記せらる。是を上

品中生の者と名づく。

《意味・訳文》

修行者は、ふと我が身を振り返って見れば、いつの間にか紫金色の台座の上に座っているのであった。十指を組んだ合掌をして、諸佛を誉め称えたと、わずかの間に、浄土の中、七つの宝石の水をたたえた池の中に産まれるのである。その紫金の台座は、大きな宝石の蓮華のようであり、一夜を経ると花が開くのである。その時、行者の身体は、磨き上げた紫金の色となり、足の下にも、七つの宝石でできた蓮華がある。佛や菩薩は、同時に光明を放って行者を照らすと、行者の眼は急に開けて明るくなる。また行者はかねてから法を学んできたお陰で、辺り一面から起こる声を聞くと、それは全てが深遠で、最高の教えであることが判る。行者はすぐに紫金の台座から下りて、佛に礼拝して合掌し、世尊の徳をほめ讃えるのである。このようにして七日を経ると、すぐさま再び逆戻りすることがないという境地に到達するのである。同時に、空中を飛行することができるようになり、あまね

く十方の世界を訪問して、諸佛のそれぞれを順次に礼拝する。諸佛の国土では、さまざまな精神集中の修行をして、一小劫の年月を経て、『すべてのものには生もなく滅もないという真理』を体得する境地に至り、諸佛からは、目の前で来世に於いて成佛するという予言を授けられる。これを上品中生のものと名づけるのである。

《私訳》

ここでは極楽浄土に往生することが即、佛に成ることではない、もう一度生まれ変わってから言っています。でも極楽浄土ではそのような概念が無いところでは？と思うのですが。

《妙星斎》

